

大林財団案件 | 2026年8月～11月

Verdict：地域の判断を学ぶAIの実証

Verdictは本研究の実証用システム名です。計画づくりに関わる住民・関係者が目標と共同評価を記録し、当日学習したAIが同じ計画の別の案でも判断を再現できるかを確かめます。

参加

計画の作成・見直しに関わる方

形式

対面・人数と所要時間は事前相談

成果

共同判断・学習結果・比較結果

題材と関係者への周知、会場・電源、学習機へ接続する通信環境についてご相談させてください。

Verdictの問題意識

行政が評価と秘密情報の取扱いを担っています

企業は提案の価値を示すため、技術・ノウハウ・実施方法などの詳細を行政へ提出します。
行政は、その提案を評価すると同時に、受け取った情報の取扱いも判断します。

提案者

詳細情報を提出する

具体的な提案ほど、企業の競争力を支える技術、ノウハウ、実施方法を含みます。

評価者としての行政

原情報を見て評価する

行政は、提出された詳細情報を受け取り、内容を確認して提案を評価します。

情報保有者としての行政

開示範囲も判断する

行政は、保有する情報について、どこまで開示し、どこを非開示とするかを判断します。

提案を評価する主体と、企業秘密の開示範囲を判断する主体が同じ行政であることが、研究上の問題です。

研究全体と今回の実証

自治体実証と秘密情報の技術実証を分けます

評価基準を地域の判断から作る検証と、秘密情報を行政に見せず評価する検証は、それぞれの成立条件を確認できるよう別に実施します。

今回の自治体実証

地域の共同判断を再現

計画の目標と共同判断を学習し、同じ計画の別の施策案で、人間とAIの評価を比較します。

別に行う技術実証

秘密情報を隔離して評価

検証用データを隔離実行環境で処理し、行政に原情報を見せず評価結果を返せるかを確認します。

将来の統合対象

二つの条件を組み合わせる

地域が定めた評価基準を用いて、秘密情報を含む具体的な提案を評価する構成を目指します。

今回の自治体実証では、企業秘密・機密情報の提出をお願いしません。

検証のゴール

別の施策案で共同判断の再現を確かめます

参加者が話し合いを通じて確認した「この計画で目指す状態」と評価判断を、同じ計画に関する別の施策案へ適用できるかを確かめます。

学習するもの

計画の目標と共同判断

何を実現したいか、何を優先するか、どのような施策を計画に合うと判断するかを記録します。

比較するもの

参加者の共同評価とAI評価

学習に使っていない同じ計画の案について、人間の評価をAI結果の提示前に確定し、学習前後のAI評価と比較します。

確認すること

判断と理由の再現

適合性、優先順位、判断理由、計画の目標との結び付け方を比較します。

参加者間で共同判断が成立した事例を比較対象とし、結論がまとまらなかった事例は区別して記録します。

自治会・農村・防災の計画を題材にできます

作成・見直しを予定する計画を、その検討や実施に関わる方々と扱います。最初の打合せで、題材・参加者・実施日などについて検討させていただきます。

想定例

- 自治会・町内会の活動計画
- 農村地域の地域づくり計画
- 地区防災計画

1 目標を確認

この計画で地域をどのようにしたいかを話し合います。

2 個別回答と共同評価

各自の評価を入力し、話し合いによる判断と理由を別に記録します。

3 当日学習

研究者がネットワーク経由で共同評価をAIに学習させます。

4 別の施策案で比較

参加者の共同評価とAI評価を比較します。

計画そのものを1日で完成させるのではなく、計画を評価する地域の判断を学習・検証します。

当日の流れと研究者側の処理

会場のMacから入力・学習・結果確認を行います



1 参加者がMacで個別評価を入力

2 進行役が話し合いの共同評価を記録

3 研究者が遠隔の学習機で学習・評価

4 Macへ結果を戻し人間の評価と比較

学習には通信接続が必要です。当日使うMac・回線・題材で事前確認し、同日中に結果を共有する進行を調整します。

入力と操作の担当

個別回答と話し合いの結論を分けて保存します

会場のMacを使う構成を基本に、参加者・進行役・研究者の画面を分けます。参加者自身のスマートフォンは必須ではありません。

参加者

自分の評価を入力

参加者IDで入り、案への評価・理由・重視した目標を保存します。学習設定の操作は不要です。

進行役

共同評価を記録

個別回答を確認して話し合い、共同評価を別に記録します。合意なし・未実施も区別します。

研究者

学習と比較を実行

入力を確定し、学習開始・進捗確認・復旧・結果出力を担当します。学習用と検証用を分けます。

検証用の人間の評価と個別回答は学習機へ送られません。学習用の共同評価と、評価する案の情報を送ります。

実装状況と今回確かめる内容（2026年9月22日時点）

入力画面から実学習まで動作確認を終えています

模擬データでは、Macの画面から学習を開始し、遠隔の学習機から結果を回収して比較表示する一連の処理を確認しました。

動作確認済み

入力・学習・結果表示

個別回答と共同評価の保存、ネットワーク学習、進捗確認、比較結果の出力を実装しています。

現地で事前確認

Macと回線・題材

当日のMacから学習機へ接続し、参加者の切替、回答保存、題材に応じた処理時間を確認します。

実証で検証

地域の判断の再現

実際の計画で人間とAIの判断・理由を比較します。模擬データでの処理成功は、判断の再現を示す成果とは分けて扱います。

自治体・地域の皆さまには、実際の計画でどの判断が一致し、どこで異なるかを、記録とともにお返しします。

自治体をお願いすること

題材・参加者・会場の調整をお願いします

自治体側で調整

- 対象にしたい地域課題・計画テーマの提示
- 計画の検討・実施に関わる方への周知と参加調整
- 対面会場・電源と、学習に必要な通信環境の相談
- 当日の自治体側窓口1名

研究者側が準備・実施

- 説明資料、入力用Mac、実証用システムの準備
- ワークショップの進行と技術支援
- AI処理、匿名化、比較結果の返却
- 学習機への接続確認と技術的な障害への対応

自治体職員にシステム操作やAIモデルの管理はお願いしません。

実施時期と費用

8月～11月に、準備・実証・結果返却を行います

8月	窓口・題材・参加者を調整	9月	事前説明・会場確認	10月	対面実証を実施	11月	ヒアリング・結果返却
----	--------------	----	-----------	-----	---------	-----	------------

求めない費用

システム利用料・専用機器購入費

自治体で生じる通常経費

電気・通信・会場・職員対応等の通常経費

自治体へお返しするもの

- ・ 計画で目指す状態と共同判断
- ・ 共同評価とAI評価の比較
- ・ 実証結果の説明・意見交換

最初の打合せ

まずは題材と実施条件をご相談させてください

確認すること

- 1 対象にしたい地域課題・計画テーマ
- 2 参加をお願いできる住民・関係者
- 3 会場と実施可能な時期
- 4 結果を庁内でどのように活用したいか

永田 右京

岩手県立大学大学院 総合政策研究科 博士後期課程
大正大学 非常勤講師

s18568un@gmail.com

まずはメールでご連絡ください。実証条件を確認した上で、実施可否を一緒に検討します。